【海外留学レポート】

私のアナザースカイ

-スイス、ベルン-

My Another Sky: Switzerland, Bern

慶應義塾大学　神谷　真由

KAMIYA Mayu

(Keio University)

キーワード：スイス留学、ドイツ語圏、安全なヨーロッパ

どこが私のアナザースカイ？

私は、高校生の時にニュージーランドに留学をした経験があったため、大学でも再度留学をしたいと思っていた。そして、その際には、英語圏ではない国で、現地の言葉を新たに習得したいと考えていた。また、将来は漠然と海外に住んでみたいという小さい頃からの夢があったため、自分が長く住みたいと思える国を探すというのも今回の留学の目標の一つにあった。そこで、大学の提携校を調べていく際、ヨーロッパの中で安全そうな国で、英語圏ではないものの、授業は英語で受けられる国を探していたところ、見つかったのがスイスだった。スイスはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4か国語を公用語としており、言語学に関心のあった私には、思いもよらず興味が凝縮した国だったのだ。それまでに行ったことがなかったこの国は、私にとって新たな冒険になると思い、未知の国スイスを留学先として選ぶことにした。このように決めたスイスが、今現在私にとってずっと住みたいと思える国になろうとは、この時は全く想像もしていなかった。

ベルンってどこにあるの

スイスと聞くとチューリッヒやジュネーブを思い浮かべる人が多いかもしれない。実際に世界への玄関口となる国際空港はその両都市にあり、人口の多さも一位と二位である。しかし首都はベルンという、少しこぢんまりとして落ち着いた都市にある。まず日本からはチューリッヒ空港へと飛び、そこからベルンまでは電車で1時間ほど揺られると着くことができる。ベルンの駅を出て初めて街並みを見たとき、こんなにも美しく素敵な場所に1年間も暮らせるのかと、息を飲むほど感動し興奮した

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ことは今でも忘れられない。街を歩いていても日本人を見かけることはほぼなく、日本人の代表にでもなった気分をベルンはもたらしてくれた。電車で大荷物を抱えていた私を心配して、自ら荷物を持つのを手伝ってくれたりする人がいたりと、人も優しく、さすがはホスピタリティで有名な国である。また、特にスイスらしさを感じたのは、鉄道の窓口でシステムトラブルによってチケットが上手く買えなかった際、お詫びにチョコレートをもらった時である。チョコレートが有名だとは聞いていたものの、チョコレートで解決しようとするスイス人のその姿勢は、なんだかほのぼのとさせられる気持ちがした。そしてスイスのチョコレートは例え一番安いものであっても、なめらかな口通りで、一度食べてしまうと他の国のチョコレートは食べられなくなるほど美味なのである。さらに、時計でも名高いスイスは、どの都市に行っても時計塔があり、鉄道の時間も時刻表通りぴったりに発車する。これは、日本人の私にとっては非常に暮らしやすい要因の一つと言える。

Zurich

Bern

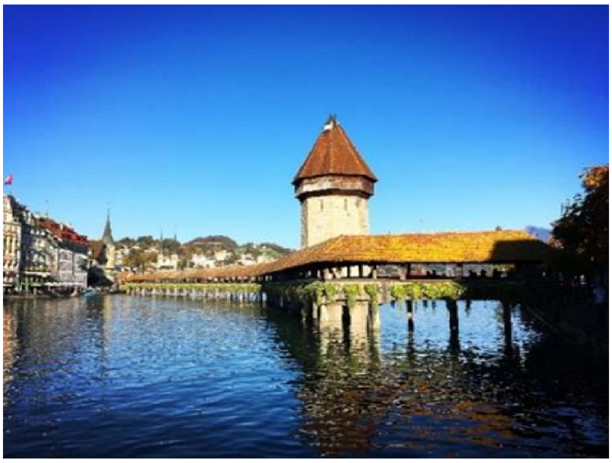
ヨーロッパの日本人

渡航前、分からないことがあるとすぐにベルン大学の留学生担当者の方にメールを書いて質問をしていたが、常に迅速丁寧で、詳細な返信をくれた。ヨーロッパとの連絡はたいていメールを送っても返事が遅いか、もはや来ないという話をよく耳にしたことがあったが、スイスは良い意味で例外のようだ。また、現地に着き、スイス人はシャイで割と内向的な人が多いという話を多く聞くようになった。実際に、初対面で自らぐいぐいと話しかけてくる人はあまり見かけない。このように日本人と似ている点の多いスイス人との交流は、私に初めて来た異国の地のような感情をあまり抱かせなかった。大学の授業が始まる前には、留学生向けにキャンパス案内や、シティーツアー、履修登録についての説明などをするオリエンテーションウィークが設けられており、ベルンの隣の州への day trip まで用意されていた。また、留学生の支援団体によってもたびたびイベントが開催されるため、留学生同士が親しくなるのは容易い。こうした手厚いサポートもどこか日本を彷彿とさせるものがあったように思う。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

アルプスとの共存生活

私は大学から紹介を受けた学生寮に住んでいる。大学へは電車かトラムに乗らないと着けないが、それもまたある意味「普通の生活」を体験できるいい機会だと思っている。私の部屋は 17 階にあるため、自室のバルコニーからは晴れているとアルプスの山々が見え、とてつもなく美しい景色が一望できる。キッチン、トイレ、シャワーは全て共同で、同じフロアには様々な国籍の男女が 10 人ほど住んでいる。キッチンにある道具はフロアごとに異なるため、私のフロアには電子レンジがなく、少し不便な思いをしたが、炊飯器はあったため、ある意味ラッキーではあった。私の部屋は洗面所のスペースを 2 人で使用しているため、隣に住んでいる中国人の博士課程の学生はルームメイトのような存在だ。いつでも話し相手が家に帰った時にいてくれるのは心強く、相談事をしたり、一緒に料理を作ったり、第二の姉のような存在に出会えたことに非常に感謝をしている。現地人だけでなく、世界中から集まる人々と出会える機会が得られることもまた留学の醍醐味なのではないだろうか。



Luzern

United Nations in Geneva

はじめまして、言語大国

スイスが多言語国家だということを圧倒的に感じさせられたのは、電車でフランス語を話す夫婦をフランス人だと勝手に思い込んでいた時のことだった。車掌さんがチケットチェックにやってきた際、スイス人が持っている電車のカードを持ち、さらに行き先をジュネーブだと伝えていたのが聞こえ、彼らはスイス人なのだと判明した。同じ国民でも住む地域で言語が変わるゆえに、言語だけではどこの国の人か一見、見当がつかないということに衝撃を受けた。しかし、よくよくもう少しスイスの言語を知ってから考えてみると、フランスで話されているフランス語とスイスで話されているフランス語は少し異なっているため、スイス人からすればしっかりと認識が出来るとのことだった。スイスドイツ語においては、現地に来る前から標準ドイツ語とは大幅に異なるために、勉強していっても無駄だとすら言われていた。実際にドイツ人に聞いてみるとスイス人のドイツ語は理解できないと答える人が大半で、スイスドイツ語も州によって方言が異なっているために、すぐにどの地域出身かをスイ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

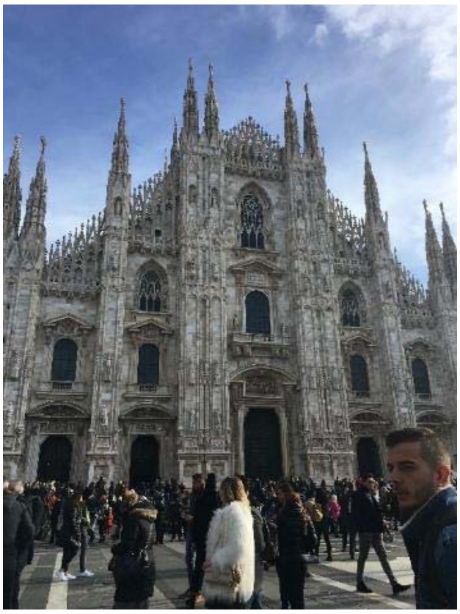
ス人同士は理解しあえるとのことだった。そしてベルンはドイツ語圏とフランス語圏の境目に位置しているために、フランス語の言葉が方言の一部に入っていることも多い。「ありがとう」を「Danke」ではなく、「Merci」と使用するのがベルン風なのである。しかし普段の生活を行う上で、ドイツ語圏の人々は英語を話せる場合が多く、意外とドイツ語が話せなくても不便には感じない。一方でフランス語圏に行った際には、一切英語が通じない時があり、スイス国内でも住む場所によって現地の語学の必要度は異なっている。このようにスイスでは、少し電車に乗っただけで言語が異なる地域に行くことができ、建物や人の雰囲気も変わるため、まるで一つの国にいるとは感じさせないほどに異文化が共存し満ち溢れているのだ。だからこそ、小さい国ではあるが、一向に退屈をしない魅力的な国なのかもしれない。

宇宙一の物価の利点

　スイスは世界の中でも有数の物価の高さを誇っていることを忘れてはいけない。外食をすれば一皿 2,000 円はくだらないのだ。スイス人の友人に物価の高さは気にならないのかを尋ねたところ、その分所得も高いため問題ないと言われた。つまり、外国人に対しては大変な暮らしだが、スイスで生活を営んでいる分には大して困らないのだ。コンビニのアルバイトですら時給 3,000 円くらいにもなると聞いた時には驚いたものだ。だからこそ、スイス人は海外旅行に行くのが好きなのかもしれない。電車賃は特に高いため、国内の移動費が、海外への格安航空券よりも高いこともざらにある。また一歩海外に出てしまえば、どこに行っても安く感じるのだという。さらにスイスはヨーロッパの内陸部に位置しており、フランス、ドイツ、イタリア、オーストリア、リヒテンシュタインと国境を接している。私の住んでいるベルンから、イタリアのミラノまでは直通電車でたったの 3 時間で着いてしまうし、フランスのパリまでも 4 時間という驚異的な近さである。ベルン駅では、ドイツの列車や、イタリアの列車を見かけることもしばしばあり、いとも簡単に列車で国境を渡って海外へと足を延ばすことができるのだ。この感覚が日本という島国で生まれ育った私からすると、とんでもなく信じられないことであり、なおかつ私を大変魅了する点でもある。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

Cheese fondue



Duomo in Milan

ヒーローがたくさん

スイスについてもう一つ挙げられるのは、スイスは徴兵制がある国の１つであるということだ。スイスの治安は基本的には良いのだが、永世中立国として自国のことは自分で守らなくてはならない。全方位を陸続きで隣国と共有しているということは、利点だけでなく、万が一の際に対しても常に用意周到である必要があるのだ。スイス人男性は半年間軍に入らなくてはならないが、週末は自宅に帰ることができる。しかし週末帰宅する際にも彼らは銃を持ち歩くことを許されているため、初めて街で銃を持ち歩く彼らを見た際に、少し恐怖に似た感情を抱いた。しかし、この徴兵制は軍に行く代わりに、社会奉仕活動に変えることもできるようだ。とはいえ、多くの友人たちが軍を経験しているのかと思うと、日本とかけ離れた文化に衝撃を覚える一方で、非常に頼もしくも思う。家庭に銃を保持することも当たり前らしく、友人の家に訪問した際、実際に銃を持たせてもらったが、一丁 4、5kg の重さで、想像以上にずっしりとしていた。スイスは日本並みに治安が良く、特段気を張らずとも生活ができるが､その裏には彼らの努力があることを忘れてはいけないのだということを痛感させられた。

言いたいことは口に出してみる

日本では、相手の気持ちを推し量ることが美徳とされる風潮があるように思う。私ももちろん日本人として、そういった技能は無意識のうちにある程度は染み付いている。しかしながら、一歩海外へと足を踏み入れた瞬間､自分で意識的にその考えを変えようと心がけている｡思ったことは口に出し、言葉で相手に伝えてみないことには何も始まらない。そして言ってみると意外と思いは叶ったりもするものである。チャンスは何度もの失敗の上にあるものだということを、スイス人の友人を見ていてよく感じさせられる。願いが叶わなくてもそれを恥じる必要はなく、伝えてみるということにまず一

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

つの成長があるのではないか。そしてチャンスは掴めればラッキーな話で、掴めた時にはそのチャンスを最大限生かせるよう自分で努力をすればよい。何事も他人のアクションを待っていては遅いのである。スイスに来てから、物価の高さに恐れをなして、大学の留学生担当者の方に、今からでも応募できる奨学金はないのかと問い合わせたところ、スイスの財団を一つ紹介してくれた。その財団に連絡をとってみると、審査にすらかけてもらえるか分からないが、応募してみることは可能だと言われたため、必死に必要な書類をかき集め、応募してみたところ、奇跡的に奨学金を受給するチャンスを掴むことができた。その時、やはり何でも思ったことは相談してみるべきなのだということを学んだ。また、連邦議事堂に見学に行った際、見学ツアーのみんなが先に外に出て行ってしまっても、友人が写真を撮りたいと後に残り、警備員さんに写真を撮ってもらえるか尋ねたところ、快く承諾してくれ、尋ねてみることで一生の思い出にもなるのだということを知った。迷った時には、少し図々しいと思われたとしても他人の目をある程度は気にしない心を持とうとすること、もしくは図々しいだなんて思われないかもしれないのだから、思ったことは口に出してみようとすることを心がけるようになった。これは帰国してもずっと忘れずにいたい私にとっての新たな教訓である。

Thun

Solothurn

やっと見つけた私のアナザースカイ

時間があるときにはスイスの国外へ飛び出し、どこか他に長く住みたいと思える場所がないかを探している。ヨーロッパには本物がすぐ手の届く範囲にあるという魅力がある。教科書で見た建物、ガイドブックに載っている名産品、全てが目の前に現れてくる。少し乗り物に乗ると、すぐに言語が異なり、通貨も異なる国に行くことができる。こうした体験はヨーロッパにいるからこそできる特権なのではないか。しかしながら、どこに行ったとしてもベルンに帰ってくるとほっとし、やはりこの地

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

が私にとって住みやすい土地だなという感覚を毎回覚える。旅行先では、高い建物や多くの人に圧倒され、テロの警戒のために立っている警察に少し居心地の悪さを感じ、スリも多いと聞くため、気も張っていなくてはならず、何かと気疲れすることが多いのだ。しかしベルンでは、高い建物も少なく、あっても連続してはいないため圧迫感を感じることはなく、スリなどの心配もさほどないため、非常にリラックスして生活ができる。少し郊外に行けばすぐに牛などの動物が出迎えてくれ、都市部に行けば必要なものは全て手に入り、旧市街は世界遺産にも登録されているほど美しく佇んでいる。このベルンの持つ魅惑的な味わいに私はすっかり虜になってしまった。「ベルン」とはドイツ語のクマという単語から来ており、ベルンの街には本物のクマが 3 頭実際に住んでいる。州の旗にもクマが描かれており、他のどの州の旗よりもチャーミングであると住んでいる人々が自負をしており、そういった愛郷心の強さにも惹かれる。ベルンドイツ語を理解することはまだできていないが、この言語の音を聞くだけで心地よく、なぜだか安心できる。留学の目標の一つであった、長く住みたいと思える場所を探すということは、ベルンを選んだ時点ですでに達成されていたのかもしれない。ベルンは私にとってかけがえのない運命的な出会いを果たした都市であり、これからも一生、いつでも帰ってきた時には「ただいま」と言える私のアナザースカイである。

デイドリーム

留学は期限付きである。特別な夢物語のような時間とも言える。正規の学生になれるわけではないが、旅行客とも違い、自分の住所を持って、ある程度は腰を据えて生活をしなくてはならない。しかし、無期限な生活でもないため、毎日が新鮮で、かつ留学生というプラチナカードを持っているおかげで様々なイベントごとにも参加でき、チャンスは無限大とも言える。ところが、ひとたび期限がくると夢から覚まされ、自分の普段の日常生活に戻らなくてはならないという厳しい条件付きだ。その夢の中で起きたことを夢のままにせず、現実の世界においてもその時の自分を思い出して何とか現実にしようと努力をするか、夢は夢だったとして、そっと胸の中にしまっておくかはその人次第である。私は高校生の時の留学では、その夢を帰国してから胸の奥にしまい込み、まるで何事もなかったかのように周囲に感じてもらえる努力をした。そうすることで日本に再び馴染もうとしたのだ。しかし、今回の留学を終えた時には、この夢物語をただの夢としてしまうのではなく、現実にあったことなのだと何度でも噛み締められるように、スイスとの繋がりを強固なものにできるよう心がけたい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

Bern

A Swiss style of Christmas tree

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.